

「多胎妊娠分科会」報告書

分科会長

倉 智 敬 一 (大阪大学産婦人科)

班 員

倉 智 敬 一 (大阪大学産婦人科)

五十嵐 正 雄 (群馬大学産婦人科)

斎 藤 幹 (東京医科歯科大学産婦人科)

馬 場 一 雄 (日本大学小児科)

研究協力者

木 下 勝 之 (東京大学産婦人科)

仲 野 良 介 (和歌山県立医科大学産婦人科)

山 辺 徹 (長崎大学産婦人科)

外 西 寿 彦, 他 (鹿児島市立病院産婦人科, 他)

研究目的

I. 多胎妊娠の疫学的研究

今年度は、前年度にひきつづき以下の項目別に各研究が行なわれた。

1. 卵胞発育メカニズムに関する内分泌学的研究と多発排卵予防の研究。
2. 卵胞発育の血中及び尿中ホルモン測定と超音波断層法によるモニタリングによる多胎妊娠防止法に関する研究
3. 多胎妊娠の管理に関する研究

II. Super-Twinの妊娠, 分娩, 発育, 成長に関する研究

昭和51年1月31日出生の山下家の「5つ子」の発育, 成長およびその後の超双胎分娩に関する研究, 記録を行なう。

研究成績

多胎妊娠分科会では、分担研究者、研究協力者により基礎より実地臨床にわたり多方面からの研究がなされ、一定の成果を得たのでここに報告する。

I. 多胎妊娠の疫学的研究

先ず、HMG—HCG 治療の前提となる基礎的研究では、仲野らより卵巣におけるエストロゲンレセプター存在を立証する発表が行なわれた。彼らはすでにFSHの卵巣に対する効果がエストロゲンをmediatorとしている可能性を示唆する実験を行なっているが、今回は顆粒膜細胞のエストロゲンレセプター存在からFSHとエストロゲンの卵巣に対する

相互作用の可能性を示した。

臨床的な側面からは従来のHMG—HCG療法に対して投与方法の工夫や併用薬剤による多胎妊娠防止の試みがなされた。五十嵐らは卵巣におけるFSHレセプター、エストロゲンレセプターの増加を期待し、またHMGからHCGに切りかえる前の頸管粘液の反応を個別化する為に、HMG—HCG治療直前にestradiol benzoate 1mgを2日間投与することを試みた。その結果多胎妊娠を予防できると発表している。一方彼らはHMGそのものの精製によりFSH/LH比の高い製剤を得てこれを臨床応用し卵巣腫大を抑制できたと報告した。斎藤らは従来より卵胞発育のモニターに尿中エストロゲン定量を行なっているが、今回は超音波断層法を用い、HCG注射前後にLH—RHアナログを併用することにより、卵巣への直接抑制効果を利用し卵巣過剰刺激症候群と多発排卵抑制を試みているが妊娠に至る例がないことにより、内膜への作用について検討する旨の報告があった。また彼らは尿中エストロゲン定量よりエストロゲン上昇時にHMG投与を1~2日間中止する間歇休止法を試みているが、従来の方法より発育卵胞数が抑制される傾向がみられた。山辺らは従来のHMG連続投与方法に対してHMG隔日投与方法を行ない過剰反応の抑制と成熟卵胞数の減少がみられたが、排卵率、妊娠率も低いことにより、治療開始時期を消退出血開始後2日目頃に早めることを検討中である旨の報告がなされた。

木下らは従来のHMG—HCG療法で妊娠した16例につきretrospectiveに超音波断層法による卵胞観察

結果を調べているが、多くは複数個の卵胞が発育し、結果的には妊娠時の胎児数は成熟卵胞数より少ないことが多く血中エストラジオールもやはり胎児数と一致しなかったと報告した。この結果従来の方法では多胎防止は困難であり、今後は超音波でモニターし、他の投与方法を開発し、複数の卵胞発育を抑制する方法を模索することが必要との報告であった。

誘発排卵妊娠の転帰の疫学調査に関しては、倉智らより報告があり、HMG—HCG 妊娠、clomiphene 妊娠、bromocriptine 妊娠のうち、多胎率は HMG—HCG 妊娠で 20.5% と高く clomiphene 療法では 4.0% であった。また HMG—HCG 妊娠に流産率が 22.0% と有意に高く、特に胎児数が多くなるに従い流産率の高いことが示された。新生児の奇形に関しては 3 群ともに自然排卵妊娠における発生率と有意差のないことが報告された。

II. 「Super—Twin」の妊娠、分娩、発育、成長に関する研究

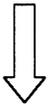
本研究では「山下家の五つ子」の成長記録およびそれ以後に分娩した超双胎に関して妊娠、分娩、発育、成長に関する研究が行なわれた。外西らは 5 胎 2 例を含めた超双胎 8 例について、すべて 30 週以後の入院、子宮収縮抑制剤を必要としたこと、双胎を含めた胎児死亡の 6 例中 5 例が 34 週以降であり、全例臍帯異常が原因であったと述べ、胎児管理上頻回の NST が必要であると述べている。また「上木家の五つ子」の身体発育は現在のところ順調である旨の報告があった。さらにもう 1 例の「田中家の五つ子」については赤松らより報告があった。この例は妊娠初期に 5 胎と判明、頸管縫縮術を行ない、34 週で帝王切開により生児を得たと報告、母乳と混合栄養であったが低血糖、高ビリルビン血症、くる病、未熟児網膜症は認めなかったと報告、また出生後の発育では生下時体重により差があつたが、満 1 歳で 1 児を除いて catch up 傾向がみられ、運動機能、PQ は良好であったと報告した。倉智らより 4 胎 3 例の妊娠、分娩経過の報告があり、早期診断と頸管縫縮、30 週以後の早産防止治療が必要であると述べている。分娩は全員経膈であったが、分娩児順にアプガースコアが悪くなることから胎児新生児管理と分娩時間短縮の面から帝王切開の方が望ましいと結んでいる。馬場、藤井より 7 歳を迎えた「山下家の五つ子」の精神、身体発育に関する報告がなされた。満 7 歳では体重は 5 児とも平均値以下で、身長に関しては平均以下であるが年

間の伸びは平均以上であったと述べている。成長評価としての Lohrer 指数は全員「やせている」との評価であったと述べている。生活歴では男女それぞれ特性がみられたが、大きな疾患の羅病はなかったとの報告であった。渡辺らは歯科学的な面から観察しており、今年度は特に上下顎の発育、咬合、永久歯の萌出時期について述べている。その結果、上下顎の発育は正常、咬合不正はみられず、特に齲蝕は 5 人全員にみられなかったが萌出時期のやや遅れる例がみられたと報告している。鈴木らは同様に歯科矯正学的立場より歯列の発育を中心に口腔清掃指導を行なっている。今後は歯列矯正学的に重要な側方歯の交代が始まるので咬合との関連で監視してゆく旨の報告がなされた。

今後、多胎発生予防に関する基礎的研究及び胎児の予後を左右する妊娠中の管理、治療についての研究が各大学でさらにおすすめる予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

. 多胎妊娠の疫学的研究

今年度は、前年度にひきつづき以下の項目別に各研究が行なわれた。

1. 卵胞発育メカニズムに関する内分泌学的研究と多発排卵予防の研究。
2. 卵胞発育の血中及び尿中ホルモン測定と超音波断層法によるモニタリングによる多胎妊娠防止法に関する研究
3. 多胎妊娠の管理に関する研究

. Super-Twin の妊娠, 分娩, 発育, 成長に関する研究.

昭和 51 年 1 月 31 日出生の山下家の「5 つ子」の発育, 成長およびその後の超双胎分娩に関する研究, 記録を行なう。